

少而学，則壯有為

7/27・28の第10回夏季研修会は、全国各地から約250名の方々に参加して頂き、無事に終了することができました。全国事務局のみならず、東海、関西、九州の事務局の先生方にも御協力を頂き、心より感謝申し上げます。

大磯というローカルな場所での開催にもかかわらず、大勢の先生方が参加されたということは、それだけT・Tへの関心が高く、また日頃の実践の上での悩みが多いことを示すのではないのでしょうか、極暑の中での2日間でしたが、講演して分科会と大変有意義な研修会であったと思います。

夏季研修会が終了して3日後の7/31の朝日新聞の朝刊に「学校信仰は変わったか」という社説が載ったのを御記憶の方もいらっしゃると思います。

恩師への手紙というスタイルをとるその社説は、戦後の50年間の教育を振り返るという内容でした。

戦後の新しい教育に期待を託し、村の神木まで切り倒して新制中学校を建設したにもかかわらず、経済の高度成長に伴いそこで学んだ子どもたちは、次々と村を去っていったという事実。

戦前までの画一的な教育や、異常なまでの競争心への反省が、戦後の教育改革の初心だったにもかかわらず、50年を経過した現在においても、何ら変わっていないという事実。

更には米スタンフォード大学の教授が指摘するように、「日本の子どもたちは小学校から高校までの12年間に、アメリカの生徒より4年分もよけいに学校教育を受けており、情報にはたけていても思考力に欠ける」という事実。

こういった事実を挙げながら、社説では戦後の教育について反省を求めているのですが、次の二つの事例を通して、教育改革への光明を見出ししているのです。両方とも名前は伏せていますが、その一つは伊奈小の実践です。内から

全国個性化研究連盟事務局研修部長

神奈川県 大磯小学校教諭 河合 剛英
育つ子どもたちの、みずみずしく、生き生きとした授業に感動したと述べています。そしてもう一つは、明治以来の変わらぬ授業を変えたいという、文部省の中野重人視学官の「いま変えるべきは学校なのだ…」という言葉です。

引用が少し長くなってしまいましたが、この社説の内容は私たちにとっても共感できるものだと思います。

最近「学校知」という言葉を口にしますが、現状においてはこれはまさに「受験知」であり学校社会の受験では通用しても、実社会では役立たないものなのです。従って社説で指摘されるまでもなく、私たちは21世紀を意欲的・主体的に生きる子どもたちを育成するために、「生きて働く力を育てる学校知」を重視しなければなりません。それが「個性化・個別化教育」の真髄だと考えます。

東大では新入生むけの副読本「知の技法」がベストセラーになっているようです。受験知だけの学生に対して、ものの見方、考え方の基本を教えるため、少人数のゼミで自分の選んだ課題を発表し、討論をかわしているとのこと…。

しかしながら実際問題としては、大学生になってからでは遅いはずで、自己教育力に必要な、ものの見方、考え方、調べ方、学び方、まとめ方等の能力は、小学校の段階から少しずつ身につけていかなければならないと考えるからです。それ故に「個性化教育」の更なる進展に期待してやみません。指導要領の改訂、T・T加配等現在は追い風を受けていますが、決して平坦な道のりではないと思います。全国の会員の皆様の御健闘と御活躍を、心よりお祈り致します。

少にして学べば、即ち壯にして為すことあり、
壯にして学べば、即ち老いて衰えず、
老いて学べば、即ち死して朽ちず。

佐藤一斎「言志四録」より

第10回夏季研修会日程

7月27日(水)

・開会式

・講演会

(1) 上智大学 教授 新井 郁夫

(2) 全個教連 事務局長 高浦 勝義

・分科会

A 学年チームによるT・T

B 学級チームによるT・T

C 中学校におけるT・T

・懇談会

7月28日(木)

・分科会報告と質疑応答

・提言

愛知 大府小教諭 永井 和美

・講演会

(3) 神奈川大学 助教授 奈須 正裕

・閉会式

☆第1日 7月27日(水)

○ 講演会(1)

「教員配置改善計画とT・Tの導入」

上越教育大学教授(前副学長)

新井 郁夫

講演の主な柱は、「学級規模の縮小を図らないのはなぜか」「なぜ複数担任なのか」「なぜ個に応ずるのか」「T・Tにはどのような教育効果があるのか」という4つの観点からだった。

複数担任の意義として、評価の観点から「全体として子どもをとらえることの重要性」という点で興味深く拝聴させて頂いた。・・・誰が測っても結果が同じになる「観点別評価」と、とらえる人の主観によって結果が違う「全体的評価」の両面で子どもをとらえることが必要である。一人の先生だと自分の良さを見つけてくれなかったけど、別の先生から自分の良さを見つけてくれたというように、相手との相互作用の違いによって結果が違ってくるのが「全体的評価」であり、本来の個性であると・・・。

最近、「個性」そのものを「観点別評価」として一律にとらえようとしている学校現場の風潮の中、「個性とは何か」を考えさせられる講演内容だった。

(池田 信一)



○ 講演会(2)

「T・T実践にかかわる諸課題について」

国立研究所教育方法研究室長

高浦 勝義

高浦先生は、T・T加配があったからT・Tではなく、個性化教育の一環としてのT・Tについて話を始められた。

まず、現在全国で多く行われている、一斉指導(従来どおりの授業のなかでの主-副形)の中でのT・T(個に応じる指導)の限界についてふれられ、「個人差に応じた指導」としての「個に応じた指導」の必要性を説かれました。従来の学級集団イコール学習集団という考え方を学習集団としては一番適していない集団編成であるとされ、個人差(学習時間・学習到達状況・学習適性・興味関心・生活経験)に応じた多様な学習集団の編成とT・Tの必然性を力説されました。

また、個人差に合わせた学習集団編成で行われる授業として、「指導の個別化・学習の個性化」による授業づくり、T・Tを進めていくうえで学習環境の必要性、諸教育機器の効果的な活用、1単位時間の柔軟な運営まで話が及びました。

最後に、T・T加配があったからT・Tではなく、「まずやってみよう!」と説かれ、わたしたち教師が、子どもの望ましい人格的成長をめざし、T・Tに向けた校内研究・実践体制の整備と運営に努めることで話をまとめられました。

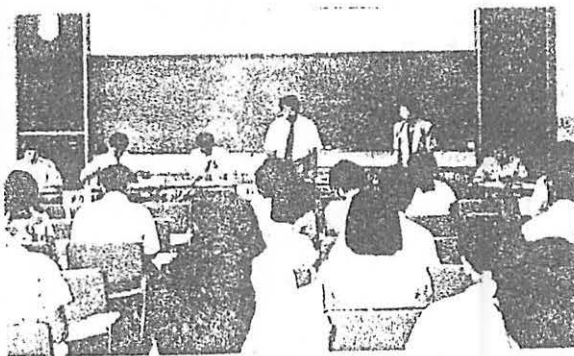
(多田 信夫)

○分科会

A 学年チームによるT・T

大磯町立国府小の館岡茂樹先生と千葉市立小谷小の三浦信宏先生の提案があった。

国府小の実践報告で注目されるのは、個にきめ細かく対応するための支援スタッフの充実である。2学級を3人以上の教師で指導するのはもちろんのこと、校長、教頭、養護教諭、事務職員などがメンバーに入って学習を進めてきた。また、多彩なボランティアの協力を得て、着実な実践も積んできている。さらに生活科では、コンピュータを活用し、児童の興味・関心に応じた学習をめざしてきた。小谷小は、平成3年度に開校したばかりの、歴史の新しい学校である。しかし、開校2年目に市教育委員会の研究校として指定されて以来ずっと個性化教育に取り組んでいる。児童自身が選択する場をできるだけふやしながらそれぞれの個性の伸長を図ろうと、異学年学習にも力を入れてきた。各学年の人間関係への心配りについての質問や、学年間で異なるねらいを持ちながらも、あえて異学年で進めて行くことのメリットなどについて質疑応答があった。もり上がった活発な分科会であった。最後に助言者の中澤先生から、T・Tをする以前に、スタッフとしてその教材を十分に語り合い、問題解決学習に組み立てていくための力量を持つことの大切さや、学年さえも越えてしまう子どものすばらしさやT・Tの良さについてお話があった。また、奈須先生から異学年やT・Tの試みは何のためにやるのかと始めから考えてやるのではなく、こんな方法でやってみたらこんないいことがあった等、恐れずに冒険していくことが、今大事であり、目の前の子どもについて共に実証し問うていきたい、というお話であった。(加藤 浩子)



B 学級チームによるT・T

発表者 算数 池田伊三郎(神奈川・大磯小)
理科 寒川 茂(奈良・東登美ヶ丘小)
堀田 啓子(奈良・二階堂小)
指導者 高浦 勝義(国立教育研究所
教育方法研究室)
池田 信一(福岡・志免西小)

参加者が約120名、その内約40名がT・T加配の先生方で音楽ホールが満杯の状態であった。発表の後、担任とT・T加配の先生との関係、指導する児童が固定化する問題、T・T加配の先生と学校全体の関係、児童の評定等の問題がT・T加配の先生を中心に出了された。主一副等のスタイル分けには限界があり、一斉授業の中では工夫にも限界がある。また、個々の指導を欲しない児童もいる。したがって、マスタリーラーニングなどのシステムを入れ、一時間ごとのT・Tだけではなく単元全体のT・Tも考える必要がある。T・T加配の先生は計画・実践・評価のすべてに関わる工夫をする必要がある。T・Tをどのように行うかという方法論だけでなく、T・Tは何のためにするかという目的論を考え子供のためのT・Tを考えなければならぬ。校内T・T推進教員等の名称も含め校内でT・Tを宣伝し、個人差を捕らえて子供の意欲を持たせるT・Tを考えてほしいということ終了した。(加藤 勇)

C 分科会 中学校におけるT・T

理科 角田 宗男・石井 幹夫
(神奈川 藤ヶ岡中)
教育課程全般・英語 井田 勝興
(福島 桜中)

本連盟では、4年前の福岡大会で初めて中学校部会が独立して開かれたと記憶しています。当時、中学校は変わりつつあるとの印象を強くもったのですが、今回の優れた報告は、まさに確実に変化したとの思いを強くしました。

神奈川・藤ヶ岡中の角田・石井両先生からは理科を中心とした「主体的学びを支えるT・T」の報告があり、多様な学習活動が実現していることに共感しました。福島・桜中の井田校長からは、教育課程全般についてのT・Tの報告があり、教科教室型校舎を生かした自己存在感のある学校づくりが紹介されました。

協議では、「加配されている教科以外でも多様な実践が求められており、教師の意識改革をどう進めるかが課題」「事実の記録の集積によって、その子の持ち味をどう捉えて指導に生かすかが鍵」との声が出されました。

分科会全体を通しては、T・Tが目的化されてしまっている現状に対する警告と、生徒による課題設定の質をめぐる検証が必要だとの方向で一致できたように思います。次回までの各校での実践を約束しあいながら散会しました。
(成田 幸夫)



この提言は、今後のT・Tのあり方に大きな指針を与えてくれました。会場は真剣そのものでした。
(橋本享子)

OT・T担当教員としての提言

愛知・大府小 教諭

永井 一美

永井先生は、前緒川小学校の研究主任として活躍されていたため、T・T担当教員のあるべき姿に迫ったお話がありました。

今、教科や時数で枠組みの決まった加配教員は、立場がはっきりせず、何をして良いか分からず悩んでいる人が多い。そんな中で全学年のカリキュラムから、T・T指導場面を取り出し最も必要性の高い学習単元や指導場面においてT・T加配をするという方法で年間計画を作成し実施しているというすばらしい報告でした。

その後3つの提案がありました。

(1つ目) 指導方法のみの追求にウエイトを置くのではなく、子どもの能力を高め、個性を生かすためにどのように学習を改善し、修正していくかの論議の中でT・Tの本当の必要性が生まれるはずである。

(2つ目) 自由は指導方法の創造の中で担当教師の個性や考え方を生かすことが大切である。

(3つ目) 関心・意欲・態度など情意面の評価にT・Tの機能はある。新しい評価に積極的に取り組み、個別化・個性化教育の効果を示す大きなチャンスである。

○講演(3)

「学習心理学からみたT・T」

神奈川大学 助教授

奈須 正裕

実践研究には、ミクロとマクロの2つのレベルがある。ミクロレベルとは、いわゆる授業論で、小さいが、すばやく目に見える着実な成果が期待できる。マクロレベルとは、システム論で、長期的で成果が頭れにくい、大きな抜本的な解決になる。カリキュラム、スタッフィング、グルーピング等授業づくりの基盤に関わるマクロレベルの研究が問われている。

T・Tは、多様な学習集団、多様な教授集団が構築できる。日本は昔から地域の大人が地域の子どもの育ててきた。T・Tは、全校の教職員が、地域・家庭とも連携しながら、全校の子どもの学習・発達を保障する。T・Tは、手段であり選択肢である。T・Tでこんなことをやってみようではなく、T・Tでこれをやりたいのだということが大事である。そして、T・Tは先生が楽になるためのものでなくてはならない。
(館岡 茂樹)

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉

〒114 東京都北区赤羽南1-16-2-504
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

全国個性化教育研究連盟会報 第30号

平成6年9月10日発行

編集責任者 事務局長 高浦勝義

編集 広報部 太田 始